



大妻多摩中学校

二〇二〇（令和2）年度

入学試験問題（午後）

【国語】

時間 50分

2月1日（土）

【注意事項】 1 問題は15ページまであります。

2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。

3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。

4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。

5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

フェアバンクスは新緑の季節も終わり、①が近づいています。

夕暮れの頃、枯れ枝を集め、家の前で焚き火をしていると、アカリスの声があちこちから聞こえてきます。残雪が消えた森のカーペットにはコロコロとした^{注1}ムースの冬の糞が落ちていて、一体あんな大きな生き物がいつ家の近くを通り過ぎていったのだろうと思います。

頬を撫でてゆく風の感触も甘く、季節が変わってゆくこととしていくことがわかります。アラスカに暮らし始めて十五年がたちましたが、ぼくはページをめくるようにはつきりと変化してゆくこの土地の季節感が好きです。

人間の気持ちとは可笑しいものですね。どうしようもなく些細な日常に左右されている一方で、風の感触や①の気配で、こんなにも豊かになれるのですから。人の心は、深くて、そして不思議なほど浅いのだと思います。きっと、その浅さで、人は生きてゆけるのでしょう。

結婚をして、新しい生活も始まり、少しずつ何かが変わろうとしています。先日、昔の荷物を整理していて、懐かしいものを見つけました。一九七八年の日記帳です。つまりアラスカに移り住んだ最初の年の日記帳なのです。

もうすっかり古ぼけていましたが、ふとページ目を開いてみると、まるで遠い昔の自分に会ったように懐しさがこみ上げてきました。それは羽田を発ち、アラスカへ向かう機内で書いたものでした。思わず苦笑してしまったのは、まるで決意表明のような文章なのです。それほど気持ちが高ぶっていたのでしょう。気恥ずかしくなるような内容なのに、そこには、アラスカという未知の世界へ入ってゆくこうとする真摯な自分の姿がありました。荷物の整理を中断し、しばらくその古い日記帳を読みふけてしまったのです。

あの頃、ぼくの頭の中は確かにアラスカのことではいっばいでした。まるで熱病に浮かされたかのようにアラスカへ行くことしか考

えていませんでした。② 磁石も見つからなければ、地図も無いのに、とにかく船出をしなければならなかったのです。

③ けれども、ぼくはもう日本へ帰るわけにはいきません。アラスカに対する想いはすっかり熟し、すでに船を出してしまったのです。

ぼくはそこから野生動物学部の学部長に会いにゆきました。何度か手紙を出していたので、アラスカにやって来ることは知っていたのです。英語さえまともに話せなかったのに、ぼくは必死で自分の気持ちを伝えようとしたのです。

これからじっくり極北きょくほくの自然と取り組みたいこと。そのためにはどうしてもこの大学の野生動物学部に入らなければならぬこと、わずか三十点の違いで一年を棒にふることは出来ないこと……そして、どれだけ長い間アラスカに来ることを夢見ていたか。

④ 今から考えれば、初めて会った学部長に、何と理不りふ尽理由を並べたのだろうと思います。ぼくの都合など大学とは何の関係もないことですからね。しかし、あの時のぼくの切羽せつぽつまった気持ちとしては、たかが三十点のことで入学させない大学の決まりも理不りふ尽気がしたのです。

学部長はじつとぼくの話聞いてくれました。そして微笑をもって言ったのです。

「わかった。私の責任で君をこの大学に入れよう。これから電話をするから、入学管理事務所へ行きなさい」

ぼくはもう天にも昇るような気持ちでした。ゆつくり歩くことが出来ず、大学のキャンパスを走ってゆきました。高台にあるこのキャンパスからは、遥はるかか彼方かなたに氷河を抱いたアラスカ山脈の連なりがくっきりと見えます。その山並みが自分を呼んでいるような気がしてなりませんでした。ちょうど今のように柔らかな ① の風が吹き始めた頃でした。

⑤ さまざまな夢を抱いてアラスカにやって来たぼくは、まるでそのひとつひとつを消化していくかのように旅を始めました。アラスカという白地はくち図の上に、自分自身の地図を描いてゆかなければならなかったのです。

⑥ アラスカ北極圏を横切るブルックス山脈の、未踏みとちの山や谷を歩きました。注2 グレイシャーベ이를注3 カヤックで旅しながら、氷

河のきしむ太古の音に耳をすませました。エスキモーの人々とウミアック(アザラシの皮で作ったボート)を漕こぎ、北極海にセミクジラを追いました。アサバスカン・インディアン注4の村で、魔術的なポトラッチを見ました。注5 カリブーの季節移動に魅ひかれ、その

壮大な旅を追い続けました。数えきれないほどのオーロラを見上げ、オオカミにも出合いました。そして何よりも、さまざまな人の暮らしを知りました……そしていつの間にか十五年の歳月が過ぎていたのです。

自分自身のアラスカの地図も少しずつ見えてきました。壮大な自然を内包するアラスカも、今、大きな過渡期かどきを迎えています。きっと、人間がそうなのかもしれないね。何も止まるものはないように、人の暮らしもアラスカの自然も変わってゆくでしょう。

⑦ 人間と自然との関わりとは、答のない永遠のテーマなのだと思います。

しかし、誰もがそれぞれのより良い暮らしをさがして生きています。便利で、快適な生活を離れ、原野に生きてゆく人々。さまざまな問題を抱えながら、急速に近代化してゆく。注6 エスキモー、インディアン……その中で人々がどんな選択をしてゆくのか、自分の目で見てゆきたいです。これまで出会った人々がどんな地図を描いて生きてゆくのか、やはり知りたいと思います。それはどこかで自分と無縁ではないからです。

とりとめのないことを書き綴つづってしまいましたが、突然目の前に現れた古い日記帳は、何だかたまらなく懐しい遠い自分に引き合わせてくれたのです。そしてしばらくの間ほんとうにぼんやりとしてしまったのです。十五年という月日は、長いようで、実に短くも感じますね。

そして、もう一度あの頃の自分に戻れないか、とも思ったのです。つまり、目の前からスーツとこれまでの地図が消え、磁石も羅針盤ししばんも見つからず、とにかく船だけは出さなければというあの頃の突き動かされるような熱い想いです。そしてたどり着くべき港さえわからない新しい旅です。もしかすると、誰の人生もさまざまな意味で、そういうことなのかもしれないね。⑧

さて、そろそろ筆をおくことにします。

あと一週間もすれば、アラスカの川には怒濤どたうのごとくサケが上ってきます。一匹のサケを両手でつかむ時、ハネのように激しくしなるその力に、ぼくはいつもアラスカの夏を感じます。

それでは、また。

注1 ムース……ヘラジカ。

注2 グレイシャーベイ……アラスカにある湾。

注3 カヤック……小舟の一種。

注4 ポトラッチ……先住民族の祭りの儀式。

注5 カリブー……北アメリカに生息するトナカイ。

注6 エスキモー、インディアン……ともに先住民族の名。

問1 本文中の三箇所かしょの①に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 立春 イ 初夏 ウ 真夏 エ 梅雨

問2 ——線部②「磁石も見つからなければ、地図も無いのに、とにかく船出をしなければならなかったのです」とありますが、それは具体的にはどういうことですか。解答欄の「と考えていたということ。」につながるように三十字以内で答えなさい。

問3 ③には次のア～エの四つの文が入ります。正しい順序に並べ替え、記号で答えなさい。

ア つまり今年はまだ無理だと言うのです。

イ フェアバンクスの空港に着き、ぼくはそのままアラスカ大学へ向かいました。

ウ しかし、入学管理事務所で必要な書類を提出すると、外国人がアラスカ大学へ入学するための英語の点数が三十点ほど足りません。

エ どうしてもこの大学の野生動物学部に入らなければならなかったのです。

問4 ——— 線部④「理不^{りふじん}尽」・⑥「未^み踏^{とう}」の意味として最も適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

④ 「理不^{りふじん}尽」

- ア 道理に合わないこと
- イ 説明が十分でないこと
- ウ 論理的ではないこと
- エ 自分勝手であること

⑥ 「未^み踏^{とう}」

- ア まだ自分が経験していないこと
- イ まだ人が発見していないこと
- ウ まだ人が立ち入ったことがないこと
- エ まだ手つかずの自然が残っていること

問5 ——— 線部⑤「アラスカという白地図の上に、自分自身の地図を描いてゆかなければならなかったのです」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア はじめてやってきたばかりのアラスカの地で、自分自身でさまざまな経験を重ねていかなければならなかったということ。
- イ 昔からあそこがれていたアラスカの地で、自分が訪れた多くの場所を地図に記録していかなければならなかったということ。
- ウ アラスカという雪におおわれた大地では、様々な場所へ移動するための道を地図に記録しなければならなかったということ。

エ 自分のアラスカの地図にはまだ何も記入されていないだったので、自分が地図を完成させなければならなかったということ。

問6 — 線部⑦「人間と自然との関わりとは、答のない永遠のテーマなのだと思います」とありますが、あなたは「人間と自然との

関わり」はどうあるべきだと考えますか。百字以内で答えなさい。

問7 — 線部⑧「そういうこと」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中か

ら一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 人生において遠い昔の自分に戻りたいと考えてしまうことが誰にもあるのだということ。

イ 人は誰でもみな熱い想いに動かされて、目標をもってそれぞれの人生を歩んでいるのだということ。

ウ 人は過ごしてきた年月を長いようにも短いようにも都合のいいように感じられるのだということ。

エ 熱い想いに突き動かされて、目的地も分からないまま旅を続けているようなものだということ。

問8 現在のアラスカと関連のあるものとして最も適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 地球温暖化

イ 捕鯨問題

ウ 人口爆発

エ 酸性雨

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしております。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

陽平さんは絹代さんの暮らす家の一間を借りて、子供たち相手の書道教室を開いた。ランプ集めが趣味の絹代さんの家には多くのランプがぶら下がっていた。陽平さんはその後、絹代さんにプロポーズして二人は結婚した。そして二人の間には由という名前の息子ができたのだが、由が小学生の時にある出来事があって、由は亡くなってしまった。

由は自転車が大好きだった。小学校に上がり、補助輪なしで乗れるようになるまで習字がはじまる時間まで友だちを誘って近隣を走りまわり、あとで聞いて、えっ、と声をあげたくなるくらい遠いところまで出かけていった。十二インチから十六インチ、すぐにまた二十インチと、成長にあわせてシャツを着替えるみたいに由はつぎつぎに新車をねだった。このあいだ、十三回忌でひさしぶりに顔を合わせた富田自転車の富田さんが、焼香のあとの酒の席で語ってくれた話に、絹代さんはありがたく耳を傾けていた。由君はうちの①上得意だったからねえ、やってくれと言われたことは、たいていやってあげましたよ、と富田さんは法事のたびにおなじ話をしているのをすっかり忘れて、でも、心をこめて陽平さんに相対していた。法事というのは、結局おなじ思い出話をなんども語り直す場なのだ。

うちらのような商売でも流行りものがありましてね、兄貴がいる友だちにでも吹き込まれたんでしょ。な、競技用自転車のまねっこだったかもしれません。グリップを取りはずしてパイプだけにしたハンドルに、布製の色テープを巻くんですよ。雨にあたれば色なんて褪せちゃうよって忠告したんですが、どうしてもって、友だちが赤や紺をしてるのに、あの子は黒じゃなきゃ、さまにならな、なんてずいぶん大人びたことを言っただけ、そういうときの口調は、あなたにそっくりでしたよ、先生……。

あれは小学校二年生のときだったか、富田さんにパンクの修理を習ったと由が自慢げに帰ってきたことがある。ただで教えてくれたというから絹代さんがびっくりしていると、そのかわり、来月と再来月の小づかいで、車体につける水筒を買う約束したんだ、だ

から富田さんにも 見返りはあるよと言う。見返りだなんて、そんな言葉、いったいどこの誰に習ったの？ 偉そうな口きくんじやないの、あんまり押し掛けちゃ迷惑でしょと叱ってやると、富田さんはいいひとだよ、自転車のことなら、なんだって知ってるんだ、でも、ぼくたちがなにか買ってあげないとお客さんがいないもの、と真面目な顔で応えるので、彼女は吹き出してしまった。大手スーパーに安い自転車がずらりとならび、ひととおりの調整ができる人材も確保しているご時世に、町の小さな専門店がどうやって生きのびていくか。それはなにも自転車屋にかぎった話ではない。でも、富田さんの顔を見るたびに、絹代さんはあのときの由の、母親の笑いをとって得意げな表情を思い出すのだ。まるで飼い主に褒められた子犬みたいなの、心の底から嬉しそうだったあの表情を。

寂しがつている絹代さんを気づかなくて、陽平さんが犬でも飼おうかと言ってくれたことがある。しかし、ここに来る子たちがみんなあたしの子だから、いいの、と彼女は断った。少女時代、絹代さんはコウタという柴犬を飼っていた。犬かきという言葉が本当かどうか知りたくて、ある夏、尾名川へ連れて行き、浅瀬の冷たい水のなかにそっと離れた。すると彼女の両手が離れるか離れないかのうちに、どんなふうにまわしているのか蹴りあげてしまった川底の細かい砂に邪魔されてはつきりと確かめられなかったけれど、コウタは短い四肢をくるくるとまわしてあたりまえのように水に浮いたのである。顔を濡らしさえせずに、どうして泳げるんだらう、誰に教えてもらったんだらう。びっくりしているうち、コウタはあつというまに岸にたどりついて彼女のほうを振り返った。その表情があまりに人間みたいでつい笑ってしまったのだが、あのとときの由の顔が、いまの絹代さんの頭のなかでコウタと重なる。どちらが古い記憶なのか、はつきりしなくなる。すぐ拭いてやろうとして取り出したタオルをすりと逃れてコウタはぶるぶる身体を奮わせ、くしゃみをひとつしてからなにごともなかったかのようにまた川原で遊びはじめた。家にもどって母親にその日の出来事を話すと、犬は本能で岸のほうに泳ぐから大丈夫だろうがね、万が一、流れに負けて岸にたどりつけなかったら、おまえ、どうするつもりだったんだい、ときつい声で言うのだった。あとを追いかけて自分のほうが溺れたら、どうするんだい？ この次からは念のために誰か友だちを連れてくんだよ。

⑤ 念のためか、と絹代さんはつぶやいたものだ。念のためって、いったい、どういうこと？ あのとときからずっと、大人になって

もそれが気になっていた。大丈夫だとは思いうけれど、万一のことがあるから、少しでもあやまちを回避できるような、念のため。ふたたび絹代さんはつぶやく。わたしはまるで、念のために生きてきたみたいなものだ、念ばかり押されて、念ばかり押して。押されない念があったら、お金を出してでも買いたい。押されなくてもいい念があったら、世界中をさがしまわってでも手に入りたい。でも、あの日だけは、つまらないこだわりを棄てて、外に出ちやだめよと、それこそ念のために声をかけておけばよかった。

夜半から降り出した大雨で通りは一面の川となり、濁流がうなりをあげて低い土地へと流れていった。路肩に停められた車と電柱が見えるだけで下になにがあるかはまったくわからない。大雨洪水警報の発令で学校は休みになったものの、朝ご飯を食べたあと外に出た由は川と化した道路に目を見張り、きつと、ほんとの川はもつとすごいんだろうね、と興奮しながら絹代さんに言った。そのあと内緒で大きな長靴を履き、雨合羽を着て、数百メートル先の尾名川を見に出かけたのだ、それも自転車を引いて。橋への道は登り坂になっているから、途中まで引いていけば、あとはなんとか乗ることができる。川をながめたら急いで戻るつもりだったのだろう。水に沈んだ長靴は重く、容易に進めなかったはずだ。おまけに下水道が満杯になって、あふれ出した水がマンホールの蓋を持ちあげ、濁流の下にばかりと見えぬ穴が空いていた。由はその穴に飲まれ、絹代さんが少女時代にコウタを泳がせた尾名川まで、暗いトンネルを運ばれていったのだ。

遺体が発見されたのは、雨があがった数日後、五キロも下流の岩場だった。先に見つかった自転車である程度の覚悟はできていたとはいえ、呆然自失を通り越し、ほとんど半狂乱になった絹代さんは、あたしも死ぬ、死んでやると泣きわめいた。あばれる絹代さんを羽交い締めにして、気持ちが鎮まるまで押さえていたのは、そのときだけ。針金ながらの書道の先生からひとりの屈強な男性になった陽平さんで、あなたがぼんやりしてるからよ、いっしょに家にいたのに、あなたがぼんやりしてるからよ、と責められながら、陽平さんはなにも言わずに耐えていた。落ち着いたあとも、絹代さんは書道教室の子どもの元気な姿を見るのがつらくて、この子が無事でどうしてあの子がと理不尽な比較をする自分がいっそう空しかった。辛いのは陽平さんもおなじだったはずなのにと悔いたのは、ずっとあとのことだ。六十をまぢかに控えた陽平さんの年齢を考えれば、なおさらのことだった。

表向き、陽平さんはなにも変わらなかつた。若返りはしないが老けることもなく、息を止めて一気に筆を走らせる書の道に、肺活

量と集中力は不可欠だからと教室の子どもたちともども運動に精を出す一方、絹代さんの気晴らしになりそうな催しには、苦手なのを我慢してきちんとつきあってくれたし、むかしの友だちとの小旅行などにもどんどん行かせてくれた。ランプが急激に増えたのは、そのころからだ。ただし、それでも絹代さんは火を灯さなかつた。陽平さんにいくらあきらめられても首を縦に振らなかつた。

ところが、陽平さん恒例の、やつぱり、買ってきたねえという出迎えの言葉にこれまた恒例の応答をしながら、絹代さんの頭には、なぜか葬儀のときの富田さんの声が響きはじめたのである。怒らないで聞いてください、と富田さんは絹代さんと陽平さんの目をのぞき込むように言ったのだ。由君が最後の自転車を買ってしばらくしてから、前輪の発電機をはずして、^{注1}カンテラみたいな脱着式ライトにしたいって頼んできたんですよ、電池式のやつです、ハロゲンはまだまだ普及してなかつたから、ハンドルの軸にとりつけて、自分でスイッチを入れるんですな、光はそれほどよくありませんがね、あれなら夜、坂道を走るときに車輪にかかる抵抗がなくて楽にペダルがこげるし、電池があるかぎり、速度に関係なく一定の光で闇を照らせるんです、ただ持つと重いし、よく壊れる。

だから反対しました、発電機のほうがいいってね、いまになって思うんです、あれをつけてあげてれば、暴風雨のなかで自転車を引いてもとりあえず明かりがあつて、誰かが気づいたかもしれない、危ないから帰れと言ってくれたかもしれないって……。

聞きながら、絹代さんは梁にかかっている灯油ランプを眺め、どれかひとつを由に持たせてやりたい、いまからでも持たせてやりたいと、ふいに溢れる涙を抑え切れなかつた。いやあ、つまらんことを申してと富田さんも涙声になつたが、陽平さんは、そうでしたか、いや、そうでしたか、とつぶやいただけで、それ以上はなにも言わなかつた。涙も流さなかつた。絹代さんが知るかぎり、陽平さんが涙を見せたのは、一日じゅう雨のなかを探しまわつても由が見つからず、力つきて戻ってきたときだけだ。葬儀のときも、その後いつのまにか五度を数えた法事のときも、危なくなると少し顎をあげ気味にするだけで激しく取り乱すことのなかつた陽平さんの背中では、はじめて会つた日のように、いつもさみしく伸びていた。子どもらは喜ぶよ。ぜんぶと言わず、ひとつ、ふたつ。たとえば、の話だがね。そんな言葉を聞いたとたん、彼女は思いがけずはつきりした口調で、灯しましょう、と応えていた。

⑧ 火を灯しましょう、いま

「おい、おい、やけになることはないよ」

「庭でなら、大丈夫でしょ？」

「本気なのかね。だったら明日、子どもたちが来てからでも、いいじゃないか」

「いますぐがいいの。お願い、手伝って」

絹代さんは着替えもそこそこに、納屋なやから脚立きゃくたちと常備してある赤い灯油タンクを運び出し、ひとつずつランプをはずすと、陽平さんをうながして灯油を入れてから、それを庭先にならべた。ぜんぶで四十以上あった。

「これにみんな火を灯して、権現山ごんげんやまから眺めましょうよ」

「いつもと、言うことが、逆だな。火事になったら、どうする」

「火が移りそうなものは、庭にはないわよ。様子がおかしければ、走っておいてくればいいじゃないの。むかし陸上で鳴らしたって人は誰？」

しばらく黙ったあと、わかった、と陽平さんは絹代さんのほうを見ないで言い、でも、権現山に、のぼるんならね、夏だからって、なにか羽織はつて来ないと、冷えるよ、とつぶやいた。

「平気。あそこまで登れば、息も切れるし、身体もあつたまるわよ」

「そうか……それなら、いいがね……でも、ぼくは、ちょっと、寒いな」

驚いて、絹代さんは陽平さんの横顔をまじまじと見つめた。この十年、風邪ひとつひかない人だったのに、なんだか先割れた筆みたいに頭髮の抜けた頭がふらふらしている。どうしたの、大丈夫？ 声をかけながら絹代さんがその干ひからびた狭い額にてのひらをあてると、まだ灯してもいないランプの火にはてりでもしたのか、薄墨うすずみを掃はいたような汗がじつとりと浮き出していた。

(堀江敏幸『雪沼とその周辺』より「送り火」〔新潮文庫〕)

注1 カンテラ……携帯用の石油灯。

問1 — 線部①「上得意」・②「見返り」の意味として最も適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① 「上得意」

ア その店にとってとてもよい客のこと

イ その店の人と気の合う客のこと

ウ その店の人が接客しやすい客のこと

エ その店の内情に詳しい客のこと

② 「見返り」

ア 振り向いてうしろを見ること

イ 相手のしてくれたことにこたえて何かをすること

ウ 商売で利益をあげること

エ お互いの利益になることをこつそりと約束すること

問2 — 線部③「心の底から嬉しそうだったあの表情」とありますが、この時に由が発したセリフとして最適な部分を本文中より探し、最初と最後の五字を答えなさい。

問3 — 線部④「あのときの由の顔」とありますが、その時の由の表情を説明した部分を、本文中より十五字で抜き出しなさい。

問4 ———線部⑤「念のためか、と絹代さんはつぶやいたものだ」とありますが、この——線部以降「念を押す」話がしばらく続くのは、なぜですか。解答欄の「と絹代さんが考えていることを示すため。」につながるように八十字以内で答えなさい。

問5 ———線部⑥「針金さながらの」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「針金さながらの」とはどのような様子ですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア ほっそりとして弱々しい様子

イ かたくて人にまとわりつく様子

ウ 筋を通して融通がきかない様子

エ おだやかで温厚な様子

(2) ここで使われている比喩表現として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 隠喩 イ 擬人法 ウ 直喩 エ 対句法

問6 ———線部⑦「六十をまちかに控えた陽平さんの年齢を考えれば、なおさらのことだった」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 六十歳に近い陽平さんにとっては、自分の死期が近いうえに、息子まで亡くしたことを考えると二重の辛さがあるだろうということ。

イ 六十歳に近い陽平さんは人間の人生とは何かを理解していて、小さい子供の死にはいつそう悲しみを感じるだろうということ。

ウ 六十歳に近い陽平さんは、その歳になってからようやく息子の死を受け入れることができるようになったのだろうということ。

エ 六十歳に近い陽平さんにとっては、人よりも遅くにできた子供だったから、息子の死に対しては人一倍深く悲しんでいるに違いないだろうということ。

問7 — 線部⑧「火を灯しましょう、いま」とありますが、絹代さんはなぜそのように言ったのですか。八十字以内で答えなさい。

問8 この作品についての説明としてふさわしくないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 登場人物の名前に「さん」をつけることで、作品全体にやさしい感じを生んでいる。

イ 前半ではセリフにほとんどカギカッコを使わず、後半ではセリフにカギカッコを使うことによって、過去から現在への場面の転換が示されている。

ウ 最後の部分での陽平さんについての描写には、陽平さんに確実に死が訪れることが明示されている。

エ この作品のタイトルである「送り火」には、絹代さんが灯すランプの火が亡くなった息子への慰霊いれいであるという意味も込められている。

三

次の各問いに答えなさい。

問1

次の①～⑤の文の——線部のカタカナを適切な漢字に改めなさい。

- ① 台風がセツキンする。
- ② 選挙にトウヒヨウする。
- ③ 働き方をカイカクする。
- ④ ラグビーのシトウに興奮する。
- ⑤ テイボウが決壊する。

問2

次の慣用句の□に入れるのに最も適切な漢字一字を、それぞれ答えなさい。

- ① 彼に話をして、取りつく□もなかった。
- ② 俳優としての彼女の仕事ぶりも□に付いてきた。
- ③ 彼の考え方は、木を見て□を見ずという感じだ。
- ④ 指示を出したい人が多くて、船頭多くして船□に上るといふ状態だ。
- ⑤ □のないところに煙は立たないというように、あの噂は本当だ。

以下余白

